

てことがイコール青春にしたいくないわけ。

鳩山…じゃあ、『ウオーターボーイズ』とかと『リンダリンダリンダ』はどこが違うって考えた？

一路…うーん、やっぱり成功しないってところが私はポイントだと思ってる。

鳩山…成功しなかったっけ？

一路…成功したっけ？ 音楽は演奏できたよね。雨が降ったから、みんな体育館に来て、最終的に客もたくさん増えた。

鳩山…成功はしたんじゃないの？

一路…うん、音楽自体は成功して終わったのか。

鳩山…あの4人が寝坊して遅刻するんだけど、怪我した子とかが間を持たせて。成功した先までは描かれないんだけど。エンディングは「いくよー」ってところで切れて、ブルーハーツの曲になる。

一路…「リンダリンダ」は流れるんだけど、「僕の右手」が流れないんだよね。

鳩山…そう。で、エンディングの曲にかぶっていくんだよ。

一路…そっか、そうだったね。音楽自体は成

功するんだけど、ライブ中のカットが暗い下

駄箱とか暗い廊下とか、そういうのを入れてくるんだよ。成功してる音楽をやってる合間に、合間にそういう暗いカットが入るところが、私は暗い学生生活を送ってる人たちに頑張

らせてメッセージを送ってる気がしたわけ。だから、成功だけじゃない部分を感じたから

こそ、良かったのかなって思ってる。諸手を上げて「良かった！」って印象が残るんじゃないかって、ちよっと暗い感じもあったところが良かったと思う。

鳩山…最後、前田亜季に「好きな人に告白できた？」って聞いて、「できなかつた」って笑って終わるよね。そこもちよっと不達成感が描かれてる。でもそれが否定されてるわけ

じゃなくて。ただ、あれ系の話って多々あるけど、撮ってる人の、その人その人のちよっとした違いがあるよね。高校生を描いててもさ。高校生ものって、他に何がある？

一路…だからさ、まず高校生ものでいいのからって問題があるでしょ。

鳩山…あー青春映画の定義だね。

## 青春映画の定義

鳩山…青春映画に絶対に入る三力条みたいなのが決まったらいいね。

一路…三力条（笑）いいね。

鳩山…例えば「エロ」「ダチ」「夢」とか（笑）『ルーキーズ』<sup>⑤</sup>とかわかりやすい基本形態だよ。青春映画の基本形態はあれかもよ。私たちがあまり得意としない分野だけど（笑）

一路…確かに。友達がいて。

鳩山…マネージャーがかわいいみたいなの。

一路…夢をかなえるストーリーっていう感じも。

私がTSUTAYAで『天然コケッコー』

⑥を借りる時、「ノスタルジーにひたる作品」って書かれてて、それって「制服」からきてるイメージなんじゃないかなって思ったのね。だから一般的に、「制服」＝「青春」なのかなって。『花とアリス』<sup>⑦</sup>とか。岩井俊二

⑤ 平川雄一朗『ROOKIES・卒業』（二〇〇九年）

⑥ 山下敦弘『天然コケッコー』（二〇〇七年）

⑦ 岩井俊二『花とアリス』（二〇〇四年）

も青春映画だと思っのね。

鳩山：『四月物語』<sup>⑧</sup>とかね。「愛の奇跡と呼びたい」って言って終わる（笑）

一路：『四月物語』とかまさにそうだよ。あと、『リリイシユシユのすべて』<sup>⑨</sup>とか暗い青春って感じだし。『Love Letter』<sup>⑩</sup>もそうかな。そういうノスタルジーっていうか、思い返すものとしての青春っていうのが要素としてあるよね。

鳩山：「青春」って呼んだときにもう思い出なのかな。結局、過ぎた後にあれが青春だったって思うものかもね。

一路：『グッバイ、レーニン！』<sup>⑪</sup>を観たんだけど、「オスタルギー」って言葉があるのね。

ドイツ語で。「オスト」が東側って意味で、あとはノスタルジーかな。つまり、ベルリンの壁が崩壊して、統一ドイツになった後に、東側を懐かしんで「でも、東もそれほど悪くなかったじゃない」って思うことらしいの。だから、自分の青春を「それほど悪くなかつ

た」って思い返すっていう意味で、ノスタルジーも青春映画の要素としてあるんじゃないかと思うんだけど。

鳩山：そうね。だとしたら、そのノスタルジーは実際に過去に経験したものなのか、そうではなくて過去こういう経験ができれば良かったのっていう思いなのかっていう違いがあるよね。でもいわゆる青春映画のような青春を送って来た人って少数派だと思うのね。大半は、そういう経験とかあったのになって思う。

一路：たぶん、大半は「ああこういう青春したかった」って思いながら観てるんじゃないかな。

鳩山：思い出と憧れが混ざり合ってるのね。そういう現実と憧れに対する距離の取り方が、それぞれの青春映画を作るのかもね。成功しないところが良いって言うてる一路さんは、やや現実寄りとかさ。

## 青春映画ではない映画

鳩山：『俺たちに明日はないっス』<sup>⑫</sup>と同じ原作者のさそうあきらが描いた『コドモのコードモ』<sup>⑬</sup>では子どもたちだけで妊娠・出産を解決しようとして、大人の不在なんだけど、でも青春映画ではないよね。

一路：そこよね。青春映画ではない映画ってどんな映画かってことよね。

鳩山：逆側から攻めるみたいなの。一路：だから、難しいよね。ただ、『コドモのコードモ』はある意味青春映画とも言えるよね。みんな子どもができたってことを乗り越えるわけじゃん。

鳩山：だから「ダチ」「エロ」「夢」はあるよね（笑）だけど、あれを見て青春映画とは言えないよね。

一路：似た系統で、『14才の母』<sup>⑭</sup>とかドラマであったよね。

鳩山：だけど、青春ドラマっていうよりは、「妊娠もの」ってジャンルだよ。

一路：確かにそのジャンルある（笑）妊娠ものっていうジャンルが青春映画に含まれな

⑧ 岩井俊二『四月物語』（一九九八年）

⑨ 岩井俊二『リリイシユシユのすべて』（二〇〇一年）

⑩ 岩井俊二『Love Letter』（一九九五年）

⑪ ヴォルフガング・ベッカー『グッバイ、レーニン！』（二〇〇二年）

⑫ タナダユキ『俺たちに明日はないっス』（二〇〇八年）

⑬ さそうあきら『コドモのコードモ』（双葉社、二〇〇五年）

⑭ 井上由美子『14才の母』（日本テレビ、二〇〇六年）

いんでしょ？ それは、別のところにテーマがあるからじゃない？ 青春映画は特にテーマがないんじゃないの。

鳩山：妊娠っていうのは、現実なんだと思う。現実の方に傾いちゃってるんだよね。青春は、性を獲得するまでの話なんだと思う。「童貞もの」っていうか。

一路：あるね。『Stand Up!』<sup>⑤</sup>とか。

鳩山：そういう子どもから大人へっていうか。少女漫画でいう片思いから両思いになって物語が終わるみたいなの。やっぱり、青春映画は現実じゃないっていうのがポイントだよ。一路：だけど、非現実すぎもしいと思っただけで、でも、そこにノスタルジーが加わることで、観てるこっちも非日常にさせられる。日常・非日常の両方を含みながら。鳩山：ファンタジーではないもんね。一路：そう。内容自体は現実んだけど、観てる方は日常じゃなくなってしまう。

## 時代を切り取る装置としての「卒業」

鳩山：『白線流し』<sup>⑥</sup>とか私の中では、ザ・青春ものって感じだよ。

一路：時間軸長いよね。高校生から大学に入ってる。

鳩山：『北の国から』<sup>⑦</sup>のポストを狙ってるんじゃないかって感じの（笑）

一路：でも、『北の国から』は青春ドラマじゃないよね。

鳩山：あれはもう「大河ドラマ」だね。

一路：大河ドラマって（笑）

鳩山：最初の子役がすごい大きくなってね。実際、結婚も離婚もしたよ（笑）

一路：あれは長すぎるな。そうするとやっぱり青春って、時代を切り取らなければいけないってことよね。人生全部みたいな感じじゃなくて。やっぱり「ある時代」ってことよね。鳩山：そう思うと、「卒業」っていう要素があると思う。時代を切り取る装置としての

「卒業」。「卒業」っていうのをきっかけとして、非現実から現実へっていうね。ラストは卒業でみんなばらばらになっていくのよね。『オレンジデイズ』<sup>⑧</sup>とかも。

一路：『天然コケッコー』も、『天使なんかじゃない』<sup>⑨</sup>もラストは卒業だしね。全部、卒業じゃん！

鳩山：もうこれは映画の『卒業』<sup>⑩</sup>を観ないといけないかもね（笑）観たら青春映画の答えが分かるかも。

一路：やっぱり王道パターンなのかな。

鳩山：卒業によって一定の世界から外になることになる。その結果「あの頃」っていうものが出来るっていうか。「卒業」っていうものを最後にすることによって、青春が作り上げられる。

一路：卒業っていうのが、社会的に作り上げられた装置なんだよね。子どもから大人へ切り替わるっていう、そういう概念としての、「卒業」なんだ。だから、私は破壊的な思想

⑤ 金子ありき『Stand Up!』（TBS、二〇〇三年）

⑥ 信本敬子、原田裕樹『白線流し』（フジテレビ、一九九六年～二〇〇五年）

⑦ 倉本聰『北の国から』（フジテレビ、一九八一年～二〇〇二年）

⑧ 北川悦吏子『オレンジデイズ』（TBS、二〇〇四年）

⑨ 矢沢あい『天使なんかじゃない』（集英社、一九九一年～一九九四年）

⑩ マイク・ニコルズ『卒業』（一九六七年）

だから、そういう感じじゃなくて全然違う形態の青春映画を考えたいんだよな。

鳩山：『卒業』の映画の中で、「卒業と同時に出る答えなんかはない」って言ってたよ。

一路：（笑）それは深いね。

鳩山：装置としての、「社会的な卒業」と「個人の卒業」は違う。だけど、そうはいってもずっとそのままだったら人間って変われないじゃん。やらされるってことも重要だと思うんだよ。ライフステージが変わっていくことで、内面も変わっていくし。大人って「なるもの」じゃなくて、「ならされるもの」だと思うのね。

一路：そうね。

鳩山：だって、ならなくていいって言われたら皆ならないでしょ。だから、ならされるものなんだよ。たとえば、生まれなくていいよって言われたら生まれないことを選ぶ人だってたくさんいる。けどまあ、気が付いたら存在させられてた。だからこそ主体的に存在する道を皆探していく。

一路：だけどき、大人にならなくてもいいよっていう状態をどうにかして作りたいんだよ。

よ。

鳩山：個人のレベルではできるよね。自分が大人にならないって言ってしまえばいいじゃん。自分がそれでいいなら。

一路：いや、違うんだよ。個人のレベルでは絶対できるんだけど、それを社会的にやりたいわけ。

鳩山：（笑）

一路：だってさ、個人でそれをやろうとしたら、なんか排除された人々になってしまうじゃん。だから、その社会の輪の中で、大人の輪の中で、大人じゃないっていう状態を作りたいわけ。それをどうやって叶えるかっていう。

鳩山：だけど、結構いるじゃん。昼は大人、夜は子どもみたいな。輪から外れないっていうか、スーツでバスケやるとかね。

一路：そうね（笑）

**大人とは？子供とは？青春とは！？**

鳩山：『俺たちに明日はないっス』の終わり

はね、高校の卒業式なわけ。高校時代はエロいことに明け暮れてて、主人公が「明日から何しよっかなあ」って呟いて、「そして僕は初めて明日のことを考えた」って言って終わるの。

一路：その終わり方は、明日のことを考えるのが「大人」ってこと？

鳩山：そういう意味で私は受け取った。

一路：なるほどね。高校時代は、過去にも未来にも縛られていない時代だったということだね。

鳩山：そうだね。で、未来に縛られだすってこと。

一路：ってことは、何にも縛られないっていうことが青春ってことなのかな。

鳩山：それは、「大人」と「子ども」って問題だと思うのね。性的な経験をいつするかっていう話題とかあるじゃん。それも子どもから大人へってことだし、縛られてる状態とそうじゃない状態っていうのも、子どもと大人ってことだと思っし。

一路：『リンダリンダリンダ』のなかでも、子どもと大人ってことが時々出てくるのね。

文化際でやった韓国文化教室で、子どもの線と大人の線のどちらからダーツみたいなのを投げるかってシーンとか。それで、『スウィングガールズ』とかとは違うって私が思ったのは、青春映画のなかの「子ども・大人」観が私と合うか合わないかで、『リンダリンダリンダ』は合ったのになって。

鳩山…「子ども・大人」観ね。

一路…そうだね。あと、私が思ったのは、『天然コケッコー』は大人がみんなやさしいんだよね。それを思ったときに、優しくない大人が出てきてもいいのになって思ったんだ。『エヴァンゲリオン』のテレビ版はさ、「お父さん」怖い。「お母さんに認められたい」みたいな感じで、そういう大人とうまくいかないところが好きなんだよね。結局、『エヴァンゲリオン』も「大人は見守ってるから頑張れ」的に描かれちゃったけどさ。『天然コケッコー』はそういう温かい大人ばかりなんだよ。私は、同じ監督んだけど、『リン

※庵野秀明『新世紀エヴァンゲリオン』(GAINAX、一九九五年〜一九九六年)  
 ※庵野秀明、摩砂雪、鶴巻和哉『エヴァンゲリオン新劇場版：序』(二〇〇七年)

ダリンダリンダの方が好きなのね。それは、『リンダリンダリンダ』は大人が不在なんだ。先生はちょっと出てくるけど嫌味言う感じの人で、親の話とかも出てくるけど。でも、本当に不在なんだよね。

鳩山…うん、ほんと大人の不在だよ。

一路…私は『バトル・ロワイアル』が好きだしさ、そういう「敵対する大人と子ども」って感じが好きなんじゃないかって思う。不在っていうのも…やっぱり「敵対」かなと思うし。

鳩山…『俺たちに明日はないっす』も大人の不在かもしれない。男親に育てられてる女子生徒が出てくるんだけど、生理とかも知らないわけ。何も知らないで恥ずかしくなって、結局自力で性を獲得していく。

一路…ああ、大人が教えるんじゃないよ。

鳩山…よし、やってみようみたいな。それで、もうひとつ、先生と生徒がデキてるパターンがあつて、それはもう生徒とデキるくらいのも先生だから、先生としての役割は果たしてない。

※深作欣二『バトル・ロワイアル』(二〇〇〇年)

一路…なるほどね。

鳩山…最後その先生が、お前たちに希望をもらったとか言つて、先生辞めますってなっちゃうの。大人の役割を降りる。それで先生と生徒で殴り合ったりして。だけど、結局、生徒自身は明日のことを考えて大人になって感じて終わる。無知だった女子生徒も妊娠して、相手の男は稼業とか手伝うようになって。「現実化」していく。

一路…そうね、でもなんか「子ども」と「大人」というよりは、「子ども」と「現実」みたいな。「日常」って言っちゃうとちよっと違うから、やっぱり「現実」かな。

鳩山…「現実」って何かって考えると、「社会的な義務」とかだとながると思う。

一路…その映画の、「稼業を継ぐ」とかね。

鳩山…子どもができるから、責任が出てくる。一路…さっきの大人の不在の話に戻るんだけど、大人を描かないっていうのは、そういう義務とかを描かないっていう効果があるのかなって思つて。その一方で、大人と子どもを対比して描くときには、子どもにそれをやっつてはダメって叱るある意味ステレオタイ

プ的な大人像を提示して、そういう義務感に縛られる大人っていうのと対比してるのかわかって思った。だからこそ、さっき言ってた

『俺たちに明日はないっス』の先生は良いなって思ったわけ。義務感のない人っていうか(笑)

鳩山：『バトル・ロワイアル』のなかで、どうして子どもたちに殺し合いをさせるかってところで、北野武の言葉が「大人化しろよ」って言うてるように聞こえた。大人はすごい義務だけのために生きてて、子どもは無神経にそれをバカにしたり、大人の裏側知ってるぞ的な発言をするけど、それがどれだけ大変なことかまでは知らなくてすごい上から目線だったりするじゃん。中学生や高校生くらいって。あのバトル・ロワイアル法のシステム自体がよく分からないんだけど、「大人になってみろ」って言うてる理不尽な義務を課してるような気がするのね。クラスメイトを殺し合うっていう。

一路：そうね。確かに、子どもを淘汰して最終的にクラスの一人だけを残して、大人にしようっていうことだから、それはある意味、

自分たちと同じ感覚の人を残すっていう意味で、「自分たちになれ」って言うてるのかもしれない。

鳩山：大人はそれぐらい苦しいよっていう。それに気づいてない人に対して怒りをぶつけてるみたいな感じに聞こえた。だけど大人が苦しいから青春が輝いてみえるって構図じゃちょっと悲しいな。

一路：『バトル・ロワイアル』は青春映画って言えるのかな。

鳩山：うーん。『バトル・ロワイアル』と『卒業』を比べると、ストーリーの構図は似てるよね。どっちも、既成の社会規範を打ち破って、自力で生きる道を獲得していくっていう話で。

一路：だけど、『卒業』と比べて『バトル・ロワイアル』の二人の未来は、相当過酷なものに思えるけど。

鳩山：『卒業』も、教会から逃げ出した二人が、笑顔から真顔になるってシーンがラストなのね。自分たちの未来を考えて、最後に真顔になるっていう。大人になるって、そういう感じで、与えられた世界を打ち破ることが

必要なんだけど、その先に全く新しいものがあるわけじゃなくて、結局は世界ってものもってダイレクトに向き合わなくちゃいけないってことなんだと思うんだよね。

一路：うーん。だけど、やっぱり『バトル・ロワイアル』は非日常な設定すぎて、青春映画とは思えないよ。

鳩山：確かに『バトル・ロワイアル』は非日常だよ。

一路：そう考えたら、青春映画は日常を描くことで、見る人を非日常的な気持ちにさせるってことが重要なんだね。